

● 東北

正木裕美

2022年も引き続きコロナ禍にあったものの、東北では公演時のガイドラインや海外の演奏家の来日要件が緩和されたことで数年越しに実現した公演も数多い。演奏家や主催者の想いが実ったこれらの公演とともに、主だった活動を紹介したい。

山形交響楽団と首席客演指揮者、鈴木秀美によるヘンデルの“真夏の「メサイア」”(8月7日)もその一つ。この公演は本来2020年に予定していたが、2回の延期を経て2年越しで実現した。急速、隠岐彩夏(S)と深瀬廉(Br)が代役を務めるも、東北出身の両者がのびやかな歌唱を聴かせる健闘ぶり。山響と山響アマデウスコアも対位法的な旋律の妙や物語展開を豊かに紡いで同団創立50周年の矜持を示し、忘れ難い余韻を残した。

山響と仙台フィルハーモニー管弦楽団によるブルックナーの交響曲第8番(7月23日・やまぎん県民ホール)も、当初2020年に予定されていたもの。山響と指揮を担った桂冠指揮者の飯森範親は7番までブルックナーの交響曲シリーズを進めてきたが、2管8型の山響にとって第8番の大編成は合同公演だからこそ実現し得たプログラムである。なお同公演は翌24日にも東京エレクトロンホール宮城で予定されていたが、3月16日に起きた福島県沖の地震の影響で中止となった。この地震による影響については、改めて後述したい。

前述のとおり50周年を迎えた山響は「ソロイスティック」をテーマに据え、第300回を迎えた4月定期以降、林正子(S)や小林由佳(Ms)、神尾真由子(vn)、スティーヴン・イッサリヤ(vc)、また藤田真央(p)ら第一級のソリストによる、華やか且つ充実したラインナップが並んだ。一方で、2つの記念委嘱作品、木島由美子の「風薫～山寺にて～」、小田実結子の「生まれかわりの旅～出羽の山々に想いを馳せて～」は山形の自然や風土を題材にしたもの。創立名誉指揮者、村川千秋も得意のシベリウスで指揮台に立ち、山響創立の志を今に繋いでいる。

また山響は、山形のオペラ活性化の一翼も担う。2020年に開館したやまぎん県民ホールはオーケストラピットも設営可能で、山響が入って「やまがたオペラフェスティバル」を展開している。12月10日には粟国淳演出のもと、沼尻竜典指揮、日生劇場のプロダクションで、ロッシェニ「セビリヤの理髪師」を上演。消毒やマスク、トランスジェンダーを意識した場面など、さりげなく世相を盛り込んだ演出と歌手陣の芸達者ぶりで魅了した。23年には山響常任指揮者、阪哲朗の指揮による「フィガロの結婚」(宮本亜門演出)や演奏会形式の「ラ・ボエーム」も予定される。作品を楽しむための関連企画も充実しており、今後の山形オペラ文化の発展に注目したい。

隣接する宮城県では、「協奏曲コンクール」として知られる仙台国際音楽コンクールが5月21日から6月26日まで行われた。コロナ禍においてアジアで初開催となった熱戦の詳細は、別項をご覧いただきたい。

同コンクール2019年開催時の優勝者チェ・ヒョンロク(p)と最高位シャノン・リー(vn)のリサイタルも、2020年から2年の延期を経て日立システムズホール仙台で開催。ヒョンロクが9月11日にシヨパンやラヴェルを、またシャノンが19日にイザイやブラームスなどを披露し、コンクール以来同地初のリサイタルで進境を聴かせた。

コンクールのホストオーケストラとして尽力したが、他でもない仙台フィルハーモニー管弦楽団である(ヴァイオリン部門予選では山響も協力)。コンクール会期中は定期公演ができないが、今回は審査員として来日したギドン・クレーメル(vn)らをソリストに、高関健の指揮で6月10日、東京オペラシティコンサートホールにおける特別公演を行っている(アルヴォ・ペルト:フラトレス～独奏ヴァイオリン、弦楽と打楽器のための/シベリウス:交響曲第2番ほか)。また定期公演では常任指揮者を退任する飯守泰次郎のフィナーレ企画として、ブラームスの交響曲第4番(5月定期)やシューマンの同第3番(10月定期)などを取り上げてきた。就任にあたり古典、初期ロマン派の作品に立ち返る方針を打ち立てた飯守と同フィルの、集大成と言えるだろう。一方で桂冠指揮者バスカル・ヴェロが定期公演の指揮台に久々に立った9月定期には、シューベルトの交響曲第5番やストラヴィンスキーの「ペトルーシユカ」で躍動感や色彩に溢れた演奏を聴かせた。井上道義とのコーブランド、グローフェ(7月定期)、下野竜也とのモーツァルト「ジュピター」(11月定期)など、聴き手を楽しませる鮮演も多く、幅広い時代様式への柔軟な対応力も見られた。なお飯守は23年3月に得意とするワーグナー&ブルックナーで任期を終え、来シーズンからは高関健(常任指揮者)と太田弦の二者態勢で創立50周年を牽引する。

仙台市では9月30日から10月2日までの3日間、「仙台クラシックフェスティバル2022」も行われた。市内2施設6会場にホール公演だけで延べ21,200人が来場し、土日には地下鉄駅での無料コンサートも再開された。68の有料ホール公演では、牛田智大(p)や初登場の神尾真由子が仙台フィルと協演し、北端祥人(p)、友滝真由(vn)、吉岡知広(vc)による仙台コンクールゆかりのトリオ、上野耕平(sax)、阪田知樹(p)らのリサイタル、福田進一&大萩康司(g)、そして辻彩奈(vn) & 阪田のデュオなど、演奏形態もさまざまに聴き手を魅了した。今回、チケットが300～500円値上がりし(2019年比)、前売り1300～2500円で設定されている(関係者による)とコロナ禍による影響ではないという。それでも今年は、大ホール公演の完売や幅広い客層による賑わいなど、盛況ぶりを見せた。

また、小山実稚恵によるコンサートと他分野の体験型コンテンツを組み合わせた親子向けイベント「こどもの夢ひろば“ボレロ”～つながる・集まる・羽ばたく～」も多くの人出で賑わった。8回目を迎えた今回は、7月30、31日の両日、日立システムズホール仙台内の複数会場で行われ、入場者は延べ11,310人にのぼる。コンサートでは指揮に垣内悠希、NHK交響楽団の山本英司(tp)、仙台フィルの水野一英(fg)らと宮城教育大学交響楽団を中心としたオーケストラが出演。尾高悼忠の「春の岬に来て」より“子守唄”を選んだプログラムも目を引いた。

最後に、3月16日に起きた地震の影響について付しておきたい。特に宮城県内で大きな被害があり、白石市のホワイトキューブではパイプオルガンや天井、照明の損壊により復旧の目途が立っていない。仙台市北部に位置するイズミティ21ではもとより予定していた大規模改修もあり、2024年3月末まで休館する。なお本ホールで好評の室内楽企画「イズミノオト」は22年の休館中は有料公演を行わず、アウトリーチ企画として「イズミノオトドケコンサート」を5カ所まで無料開催した。前述の合同公演が中止となった東京エレクトロンホール宮城(県民会館)も9月末日まで使用不可、市南部の楽楽ホールも7月末日までホールの使用を停止し、修復を行った。再び活況を取り戻しつつある東北の音楽界。2023年は地震もなく、さらに充実の途を歩めることを願っている。